

小学校

平成28年度

教育研究員研究報告書

国語

東京都教育委員会

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の視点	2
III	研究仮説	3
IV	研究方法	3
V	研究内容	
1	研究構想図	4
2	教員及び児童の意識調査	5
3	検証授業	6
	低学年分科会（第2学年）の検証授業	7
	中学年分科会（第4学年）の検証授業	12
	高学年分科会（第5学年）の検証授業	18
VI	研究の成果と課題	24

研究主題

自分の考えを広げ深める指導法の工夫 ～主体的・対話的な学びの改善・充実を通して～

I 研究主題設定の理由

本研究は、国語科の「読むこと」の指導において、主体的・対話的な学びを改善・充実させることで、自分の考えを広げ深める児童の育成を目指すものである。

「平成27年度 『児童・生徒の学力向上を図るための調査』」（東京都教育委員会）の読み解く力の調査の結果では、「意図や背景、理由を理解・解釈・推論して解決する力」の正答率は37.7%となっている。ある目的や意図をもって文章を読み、読み取った内容を関連付けながら筆者の思いを理解・解釈することにつまずきが見られた。

また、「平成27年度 全国学力・学習状況調査」（文部科学省）の小学校国語の結果では、国語A「読むこと」の「新聞のコラムを読んで、表現の工夫を捉えることができるかどうか」を問う問題について、東京都の平均正答率は25.4%となっており、新聞のコラムを読んで、筆者の意図や思考を想定しながら文章全体の構成や表現の工夫を捉えることに課題があることが分かった。

これらの結果は、本部会の教員が日頃の指導の中で感じている児童の課題と同様である。上記の課題に加え、児童が読む目的を意識できていないことや、授業の振り返りが感想にとどまり、身に付けた力を自覚できていないこと、そのため既習事項が次の学習につながっていないことなどが、本部会の教員から課題として挙げられた。

「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」（文部科学省 平成28年8月26日）では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて改善・充実すべき点が挙げられている。「主体的な学び」については、「子供自身が興味を持って積極的に取り組むとともに、学習活動を自ら振り返り意味付けたり、身に付いた資質・能力を自覚したり、共有したりすることが重要である」ことが示されている。また「対話的な学び」については、「子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める」ことが示されている。

そこで、本研究では、「主体的な学び」と「対話的な学び」の改善・充実に着目し、研究を進めた。学ぶ意欲を継続させ、自分の考えをもたせるために、目的や必要性を意識して取り組める課題の設定を行い、学習の見通しをもたせ、学びや変容を自覚できる「主体的な学び」を充実させた。そして、児童同士の対話に加え、児童と教員、児童と地域の人、本を通して作者の考えに触れ自分の考えに生かす「対話的な学び」を取り入れることを通じて、互いの知見や考えを広げたり、深めたり、高めたりする学習場面を計画的に設けた。

また、本研究を進めるに当たっては、説明的な文章を取り上げることとした。説明的な文章は、実社会や実生活との関わりが深く、身に付けた力を児童が自覚しやすい。このような理由から、説明的な文章を読むことにおいて、主体的・対話的な学びの改善・充実を図ることで、自分の考えを広げ深める指導法を工夫することに焦点をしぼり、研究を進めることにした。

II 研究の視点

研究主題の「自分の考えを広げ深めること」とは、小学校学習指導要領国語における「C 読むこと」の指導事項「エ・オ 自分の考えの形成及び交流」に関連している。本や文章を読んで、感じたことや思ったこと、考えたことなどを一人一人の児童がまとめ、発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりすることができるよう、段階的に指導を重ねていく。

また、副主題の「主体的・対話的な学び」は、形式的に対話型を取り入れた授業にとどまるものではなく、それぞれの児童の興味や関心を基に、一人一人の個性に応じた多様で質の高い学びを引き出すことを意図するものである。さらに、言語能力を向上させるために、言語活動を通して資質・能力を育成できるよう、児童の学びの過程を質的に高めていきたいと考える。

そこで、本研究では、主体的・対話的な学びの改善・充実を図り、自分の考えを広げ深める指導法を工夫するために、以下の視点をもって研究に取り組んだ。

1 自分の考えを広げ深めるための「主体的な学び」について

本研究では、児童が自分の考えを広げ深めるためには自分の考えをもつとともに、学ぶ意欲を持続させる「主体的な学び」が重要であると考えた。そこで「主体的な学び」を「課題の設定」、「見通し」、「振り返り」の三つの観点から捉え、実践と改善を重ねることとした。

児童がすすんで課題に取り組んだり、文章を読んだりするためには、児童が目的意識をもって文章を読めるような「課題の設定」を行い、その目的を追究していくための「見通し」をもたせ、単元全体の目標や学習活動をイメージさせるようにすることが必要である。学習を進めていく中で、「振り返り」では、学習した内容に加えて、自分の考えの広がりや深まり、身に付いた力など自己の変容に気付くことができるようにさせ、次の学びにおいても「主体的な学び」が続くことができるようにした。以上のことから、「課題の設定」、「見通し」、「振り返り」を行うことは、自分の考えを「深める」ことにつながると考えた。

その上で、これら三つの観点を、表1のように単元全体に関わる留意点と、一単位時間内の留意点との二つの留意点で捉え、自分の考えを広げ深める「主体的な学び」の実現を図った。

表1 自分の考えを広げ深めるための「主体的な学び」を実現させる留意点

留意点 観点	単元全体		一単位時間	
課題の設定	ア	① 身に付けるべき力（何ができるようになるのか）を明確にする。 ② 既習事項や他教科等との関連を踏まえ、学習内容（何を学ぶのか）を選択する。	エ	① イ-①で設定した身に付けるべき力と、オ-①で設定した学習のねらいのそれぞれに即した学習課題を設定する。
見通し	イ	① 単元の終末で児童に身に付けるべき力に対して、一単位時間ではどの程度までの力を目指すのか、段階的に設定する。 ② 既習事項やこれまでの自分の体験を生かせる言語活動を考え、具体的な学びの過程（どのように学ぶのか）を組み立てる。	オ	① イ-①で段階的に設定した力を基に、本時の終末における児童の姿を明確にし、学習のねらいを設定する。 ② 前時までの既習事項やこれまでの体験を生かして、課題を解決できるように本時を計画する。
振り返り	ウ	① ア-①で設定した力を身に付けるべき力を振り返りの基準とする。	カ	① ア-①で設定した身に付けるべき力に対して、本時までの自分の考えの広がりや深まり、身に付いた力といった自己の変容について振り返らせる。

2 自分の考えを広げ深めるための「対話的な学び」について

本来「対話」とは、子供同士、子供と教職員、子供と地域の人が互いの知見や考えを伝え合ったり議論したり協働したりする学習活動のように、自分と相手が向かい合って話をする事と考えられる場合が多い。その意味では児童が書き手と一対一で対話することはできない。しかし、「次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ」（文部科学省 平成 28 年 8 月 26 日）において、相手と対面して話し合う「対話」だけでなく、「本を通して作者の考えに触れること」が「対話的な学び」の実現に向けた項目に述べられている。

これまで行われてきた、伝え合いや交流、話し合いといった活動に加え、「読むこと」自体が「対話的な学び」に含まれていることについてどのように捉えていくかという点に課題意識をもち、本研究では、自分の考えを広げ深めるための「対話的な学び」を、「教材との対話」と「他者との対話」の二つの観点から捉えることとし、「対話的な学び」の改善と充実を図っていくこととした。

(1) 教材との対話

本研究では、「対話的な学び」として行われる様々な学習活動の中で、筆者が述べている内容や主張を叙述に基づいて読み取るとともに、それらを基に自分の考えをもつことを、特に「教材との対話」と位置付けた。「他者との対話」だけでなく、「教材との対話」を成り立たせることは、考えを広げ深めることにつながる。実際の授業においては、筆者の考えを捉え、それに対する自分の考えをもたせる指導の工夫をしていく。

(2) 他者との対話

「教材との対話」でまとめた自分の考えを、子供同士、子供と教職員、子供と地域の人と、伝え合ったり議論したり協働したりする事を通して、互いの考えを更に広げ深めていく活動を、「他者との対話」とした。対話の必然性が生まれるような課題や発問を、教師が意図的に設定することで、児童が自分の考えと他者の考えとを比較することができるようにする。その上で、対話の前と後との自分の考えの広がりや深まり、身に付けた力などを意識し、自己の変容について振り返ることができるようにしていく。

III 研究仮説

主体的・対話的な学びの改善・充実を図ることで、児童が目的意識をもって、自分の考えを多様な考えと比較したり見直したりするようになり、自分の考えを広げ深める力が育つであろう。

IV 研究方法

1 基礎研究

「平成 27 年度『児童・生徒の学力向上を図るための調査』」（東京都教育委員会）や「平成 27 年度 全国学力・学習状況調査」（文部科学省）、「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」（文部科学省 平成 28 年 8 月 26 日）等を参考にして、東京都の児童の文章を解釈する力や自分の考えを表現する力等を分析する。

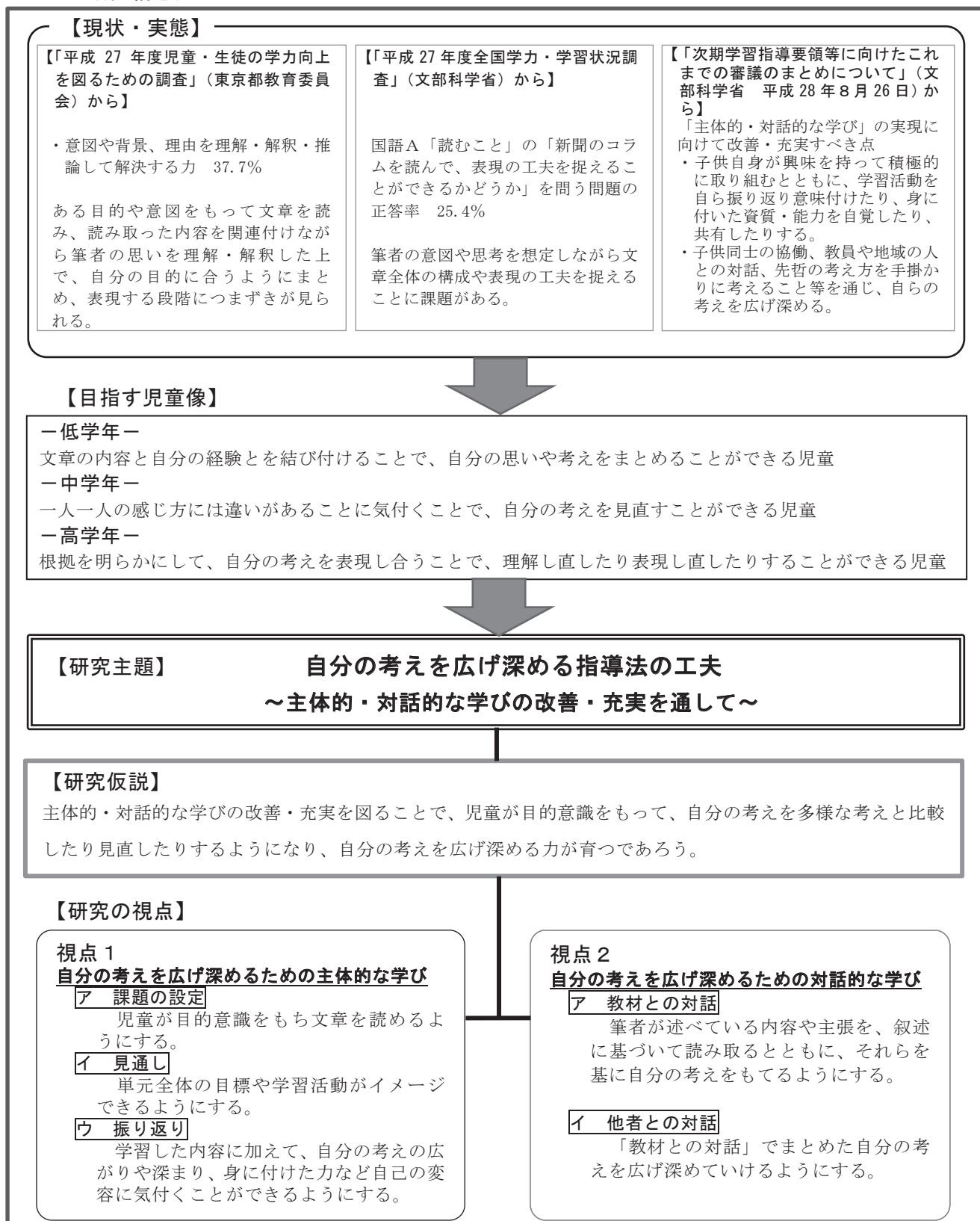
2 調査研究

教員に対して、国語の「読むこと」の指導についての意識調査を行い、その分析から「主体的・対話的な学び」を生かし、自分の考えを広げ深める指導に関する意識や現状、課題に

ついでの実態を把握する。また、児童に対しても、国語の「読むこと」についての意識調査を行い、その分析から「主体的・対話的な学び」の意識や現状、課題についての実態を把握する。

V 研究の内容

1 研究構想図



2 教員及び児童の意識調査

「読むこと」の指導における「自分の考えを広げ深める指導方法」の改善に資するために、実際にその指導がどのように行われているのかを調査した。

[平成 28 年度教育研究員（小学校国語）の所属校 15 校の教員 151 人、児童（全学年）2044 人に実施：実施期間 平成 28 年 10 月]

(1) 「読むこと」についての意識について（児童の意識調査）

質問①：国語の読む学習で、好きなものはどれですか。

設問	選択した割合
物語文	63.8%
説明文	12.0%
詩	21.4%
無回答	2.8%

説明文が好きと答えている児童は 12.0%と物語文と比べると低い値であった。「説明的な文章」の苦手意識の改善や肯定的な意識を高めるために、身に付けた力を児童が実感できるような指導法の工夫が必要であると考えられる。

(2) 自分の考えを広げたり深めたりする学習について（教員及び児童の意識調査）

質問②：児童が、自分の考えを広げたり深めたりできるように、どのような指導をしていますか（教員の意識調査）。

- | | | | |
|---------------|----------------|-----------|-----------|
| ・話し合い活動の充実 | ・ペアや小グループの学習形態 | ・考える時間の確保 | |
| ・叙述を基に根拠をもたせる | ・ICT の活用 | ・発問の工夫 | ・付箋や短冊の活用 |

質問③：国語の学習で、自分の考えを広げたり深めたりしたときは、どのようなときですか（児童の意識調査）。

設問 (複数選択可)	選択した割合
友達と交流したとき	57.7%
先生の話聞いたとき	47.7%
教科書や本を読んだとき	50.9%
その他（無回答を含む）	15.5%

質問②の結果から、教員は、児童が自分の考えを広げたり深めたりするために、様々な手だてを取っていることが分かる。また、質問③の結果からも、児童が、友達と交流したり、教科書や本を読んだりするときなどに、自分の考えを広げたり深めたりしていると実感していることが明らかとなった。このことから、現在行っている指導を改善・充実させ、自分の考えをより広げたり深めたりする学習を実感できるような「対話的な学び」の改善・充実が必要である。

(3) 振り返りについて（教員及び児童の意識調査）

質問④：授業の後に、どのような振り返りを児童にさせていますか（教員の意識調査）。

設問 (複数選択可)	選択した割合
学習して思ったこと	78.1%
分かったこと	61.6%
できるようになったこと	17.9%
次に頑張りたいこと	17.9%
その他（無回答を含む）	9.9%

質問⑤：国語の学習が終わった後、どのような振り返りをしていますか（児童の意識調査）。

設問 (複数選択可)	選択した割合
学習して思ったこと	56.0%
分かったこと	57.4%
できるようになったこと	32.7%
次に頑張りたいこと	38.4%
その他（無回答を含む）	15.2%

教員の意識調査の結果から、「学習して思ったこと」や「分かったこと」を意識して振り返りを行っていることが分かる。一方、「できるようになったこと」や「次に頑張りたいこと」の振り返りを行っていることが少ないことも分かる。児童の結果からも、同様な傾向が見られる。身に付けた力や自己の変容に児童が気付くことができるような振り返りを行うことで、「主体的な学び」を続けていくことができると考える。

3 検証授業

教育研究員の月例会や低・中・高学年分科会を通し、研究主題に迫るための授業を検討した。また、検証授業を行い、仮説の検証を行った。

9月27日（火）	主幹教諭 中島 陽一	第2学年「おにごっこ」 西東京市立住吉小学校
10月19日（水）	主任教諭 渡辺 毅	第4学年「ウナギのなぞを追って」 中野区立大和小学校
11月1日（火）	主任教諭 藤原 裕樹	第5学年「想像力のスイッチを入れよう」 世田谷区立経堂小学校
12月12日（月）	主任教諭 今富 美保	第6学年「『鳥獣戯画』を読む」 小平市立小平第十四小学校

低学年分科会（第2学年）の検証授業

1 単元名 知っているよ、おにごっこ！

教材名 「おにごっこ」 もりした はるみ （光村図書2年下）

2 単元の目標

○説明の順序に従って文章を読み、書かれている内容の大体を読むことができる。

○身近な遊びを説明する文章を読み、自分の経験と結び付けて、自分の思いや考えをまとめ、発表し合うことができる。

3 単元の評価規準

国語への 関心・意欲・態度	読む能力	言語についての 知識・理解・技能
・文章の内容と自分の経験とを結び付けて、自分の考えや思いをまとめ、発表し合おうとしている。	・時間的な順序や事柄の順序などを考えながら内容の大体を読んでいる。(イ) ・文章の内容と自分の経験とを結び付けて、自分の思いや考えをまとめ、発表し合っている。(オ)	・人の動きを表す言葉に気付いている。[イ(ウ)]

4 教材の特性

「おにごっこ」は六つの形式段落からなる説明文である。第1段落では「どんなあそび方があるのでしょうか。」「なぜ、そのようなあそび方をするのでしょうか。」という二つの問いが発される。第2段落から第5段落までは問いに対する答えの形で具体例が示され、第6段落では「さまざまなあそび方があります。」「みんなが楽しめるように。」という抽象的な答えとしてまとめられ、「だれもが『楽しかった。』と思えるようなおにごっこができるといいですね。」という筆者の考えで文章が終わっている。文章中に筆者の考えが書かれている説明文は入学以降初めての教材であるが、構成については、「問い」「具体的な答え」「まとめと考え」という順序で書かれているため、児童にとって既習である「はじめ・中・終わり」を活用しやすい文章である。

また、この教材には中学年以降で学習する事項へのつながりが2点ある。1点目は、形式段落ごとに主語に着目することで、具体例の順序に筆者の意図が読み取れる点である。中学年で学ぶ、段落相互の関係を捉える学習につながる。2点目は、筆者の考えで文章が終わっている点である。高学年で学ぶ事実と感想、意見などとの関係を押さえたり要旨を捉えたりする学習活動へのつながりが考えられる。本単元で主な指導内容として扱うことはないが、これらの説明の工夫に気付く児童がいた際に、正しく価値付けるためには必要なこととして指導者が押さえておく必要がある。

5 研究主題に迫るための手だて

(1) 自分の考えを広げ深めるための主体的な学び

ア 課題の設定

第一次では、本単元で身に付けたい力やできるようになりたいことをはっきりさせる。第1時では、知っているおにごっこを挙げさせる。多くの児童が遊んだことのあるもの、あまり遊んだことのないものなど、たくさん挙がることが予想される。その中から一つ選び、自分の選んだおにごっこを説明する文章を書くようにすることで、「説明することが難しい」、「書きづらい」等、自分の書き方に対する自己評価を行わせる。第2時では、書いた文章を友達と読み合い、その感想を書くようにする。書いたものを友達と読み合うことで、他者からの評価として「分かりづらさ」が挙げられると考えられる。それらの評価が、「自分の選んだおにごっこを説明するために分かりやすく文を書く」本単元の課題となる。もっと上手に書くために、児童は書き方のモデルとなる文章を読みたくなるであろう。児童の中での課題が明確になった時点で教材文と出合わせ、単元のゴールとなる第三次に向かって児童と共に第二次でのめあてを考える。めあてを考える際は、今後学習する他の説明文でも用いることができるような言葉を使うようにする。

イ 見通し

第一次で立てた学習計画は拡大して教室に掲示しておき、児童がいつでも単元の流れを確認できるようにしておく。児童には同じ形式のワークシートを用意し、めあてや振り返りを書き込みながら、単元全体を見通せるようにする。

第二次では、教材文の論理構成を読み取る。本教材では「おにごっこの遊び方と、その遊び方をするわけ」に気付かせたい。第一段落には、「問いの文」が二つ出てくる。二つの問いの答えを見付けながら、児童は教材文の内容と構成に着目して読み取っていく。第二次で学んだ構成を生かして、第三次では自分で選んだおにごっこの説明文を書かせる。

ウ 振り返り

毎時間の終わりには、本時の学習を通して身に付いた力を振り返る時間を設ける。課題となる「自分の選んだおにごっこを説明するために分かりやすく文を書く」ができるかどうかを観点として設定する。

教材文の内容に関する感想から、課題に対してどの程度力が付いたかを振り返る「できそう」、「できない」へ、更に「できそうです。どうしてか」というと……」のように理由を書くように、振り返りの質を高めていきたい。振り返りの質を高めるには、振り返りで書いたものを交流する時間が必要となる。友達の振り返りの内容の良さを取り入れながら、自分の振り返りの質を高めていくために、二人組や学級全体で振り返りを交流するようにする。

毎時間、めあてに対してどのような力が付いたかを振り返り、ワークシートに書きためていくことで、単元全体を振り返ったときに、児童が自分自身にどのような力が身に付いたかが分かりやすくなる。振り返りを通して、児童が達成感や満足感を感じ、新たな学習課題に対する意欲をもてるようにしたい。

(2) 自分の考えを広げ深めるための対話的な学び

ア 教材との対話

筆者の考えを捉え、それに対する自分の考えをもたせるために以下の点を重視して読ませていく。

- ・自分の体験と結び付けて読む

自分の考えをもたせるために、文章の内容を読む取手中で、「なるほど」、「知らなかった」、「やったことがある」、「やってみたい」など、自分の経験と照らし合わせながら読む。

- ・文章構成を捉えて読む

「あそび方」と「わけ」の順序で書かれていることに気付かせるために、問いの文「どんなあそび方があるのでしょうか。」「なぜ、そのようなあそび方をするのでしょうか。」から、「あそび方」と「わけ」を読み取っていく。「あそび方」と「わけ」の部分に色別にサイドラインを引いたり、表に書き抜いてまとめたりする。

イ 他者との対話

教材との対話でまとめた自分の考えを、更に広げ深めていくために、友達と交流する活動を取り入れ、以下の点を重視する。

- ・課題を把握する

第一次で、児童がそれぞれ知らせたいおにごっこについて書く。「分からない」、「できない」といった課題を把握させるために、書いた後に、友達と読み合う活動を取り入れる。

- ・振り返りと交流

教材との対話で得たことを広げ深めるために、毎時間振り返りを交流する。少人数のグループで交流し、友達の考えのよさに気付くことができるようにする。

6 学習指導計画（10時間扱い）

次	時	学習活動	手だて	評価規準 (評価方法)
一 次	1	○知っているおにごっこ この例を挙げ、一つを選んで説明した文章を書く。 ○おにごっこについて 書いた文章を読み合い、感想を書く。	○説明した文章の題材を決めやすく するため、題名「おにごっこ」を手 掛かりに例を多く挙げさせ、後で 操作しやすいように、短冊に記入 して黒板に掲示する。 ○自己評価としての「難しい」、「書け ない」や、他者からの評価としての 「分かりづらい」という感想を、 「おにごっこ」を読む必然性につな げる。	[関] 身近な遊びを 思い出しながら、説 明的な文章を読もう としている。(発言・ 記述内容)

	2	○単元を通して解決したい課題をつくる。	○「おにごっこ」という文章があることを紹介し、読んでみるように促す。	[関] 身近な遊びを思い出しながら、説明的な文章を読もうとしている。(発言・記述内容)
自分の好きなおにごっこを、分かりやすく説明しよう				
二次	3	○「おにごっこ」を読み、第1段落の二つの問いを捉えて、対応した答えの部分を探す。	○必要に応じて、説明文を読む方法として「問いと答え」と「はじめ・中・終わり」の既習を想起させる。 ○見付けた答えを交流することで、問いに対して複数の答えがあることに気付かせる。	[読] 説明的な文章の中から、問いを見付け、表に整理している。(発言・記述内容)
	4 ～ 6	○2～5段落の具体例を捉える。	○第1段落の問いに対する答えを探す方法で捉えさせ、第7時で比較できるように表の形でまとめていく。	[読] 問いの答えを見付け、おにごっこの「遊び方」と「わけ」を捉え、表に整理している。(発言・記述内容)
	7	○2～5段落の具体例をまとめて比較し、書き方の良さについて考える。	○「遊び方」と「わけ」の二つの観点で書かれていることに気付けるように、表で比較させる。	
	8	○6段落に書かれた、答えのまとめと筆者の考えを捉える。	○「～できるといいですね。」という文末表現から受け取る感じ方を発表させ、筆者の考えが文章の終わりに述べられることがあることを押さえる。	[言] 人の動きを表す言葉を理解している。(発言・記述内容)
三次	9	○おにごっこについて説明した文章を書き、以前の文章と比べた感想を書く。	○「どのようなあそび方があるのか」「なぜそのようなあそび方なのか」という構成で書くことを確認して書かせる。 ○自分自身にどのような力が身に付いたか、振り返らせる。	[読] 文章の内容と自分の経験とを結び付けて、自分の思いや考えをまとめ、発表し合っている。 (記述内容)
	10	○友達の水いた文章を読み合い、感想を伝え合う。 ○単元の感想を書く。	○以前の文章と比較して、よくなったことを見付けるように促す。 ○他者への評価や他者からの評価を通して、次の学習への意欲付けとする。	

7 本時（全 10 時間中の第 6 時間目）

(1) 本時の目標

第 5 段落のおにごっこの「遊び方」と「わけ」を捉えることができる。

(2) 本時の展開

	主な学習活動	指導上の留意点・配慮事項	評価規準（評価方法）
導入	1 めあてを確かめ、第五段落を音読する。	・ 問いを音読させた後に、答えを探しながら音読させるようにする。	
	五段落に、問いの答えはあるだろうか		
展開	2 問い①の答えを見つけて、ノートに書く。	・ 必要に応じて、隣同士などで交流を行うようにする。	[読] 問いの答えを見付け、おにごっこの「遊び方」と「わけ」を捉え、表に整理している。 【ノート・発言】
	3 見付けた答えを発表し、全体で確かめる。	・ 自分の考えと比べながら、聞くように声を掛ける。 ・ 板書した内容は、短冊に記録し、壁面の表に掲示する。	
	4 問い②の答えを見つけて、ノートに書く。	・ 全文を 1 枚に印刷した紙にサイドラインを引かせて、共有を図る。	
	5 見付けた答えを発表し、全体で確かめる。		
まとめ	6 振り返りを書いて発表する。	・ 単元のゴールに向かうような振り返りを書いている児童を称賛する。 ・ 実物投影機を使って、振り返りを共有しやすくする。	

中学年分科会（第4学年）の検証授業

1 単元名 きょうみのある部分を中心に、読書郵便にまとめよう

教材名「ウナギのなぞを追って」 塚本 勝巳 （光村図書4年下）

2 単元の目標

- 自分の興味に応じて文章の要点や細かい点に注意しながら読み、要約することができる。
- 生き物に関する科学的な読み物を読んで自分が興味をもったところを紹介し合い、感じ方の違いに気付くことができる。

3 単元の評価規準

国語への 関心・意欲・態度	読む能力	言語についての 知識・技能・理解
・自分の課題をもち、すすんで科学的な読み物を読み、興味がある部分を中心に紹介しようとしている。	・自分が興味をもったところについて、中心となる語や文を捉えて段落相互の関係や事実と意見との関係を考え、文章を読んでいる。 (イ) ・自分が興味をもったところについて、事実と意見の関係を押さえながら読み、文章を引用したり図を用いたりしながら要約している。 (エ)	・指示語や接続語が文と文との意味のつながりに果たす役割を理解し、使っている。 [イ(ク)]

4 教材の特性

本教材は、ウナギ研究の第一人者である塚本勝巳さんが、ウナギの生態をどのように解明したのかを説明している文章である。ウナギの生態に関する研究の過程が、事例-考察-事例……という流れで書かれているほか、写真や図表、地図などと文章を関連付けながら読むと、理解が深まる書き方になっている。ウナギの生態に関する謎が徐々に解き明かされていくにつれて筆者の気持ちの高ぶりも表現されているため、児童は筆者に感情移入がしやすく、生き物や科学的な読み物について興味をもたせることができる。

本文で、事例と意見の関係を押さえながら読み、自分が興味をもった事柄を中心に文章を要約し、互いに紹介し合うことで一人一人の考え方の違いに気付かせることに適した教材である。

5 研究主題に迫るための手だて

(1) 自分の考えを広げ深めるための主体的な学び

ア 課題の設定

本単元で児童に身に付けさせたい力は、自分の興味をもったところを中心に文章を要約する力である。この力が求められる課題として本の紹介を行う活動を設定した。自分が興味をもったところについての要約であるため、同じ本を選んでも内容が異なること。また、自分が紹介する本をまだ読んだことのない相手に向けての紹介であっても、内容の全てが書かれていないので紹介された側も本を読む意欲が高まると考えたからである。

今回は、特定の相手に向けた手紙（読書郵便）とすることで、より相手意識をもって取り組むことができ、受け取った相手も返事を書くために紹介された本を読む必然性が生まれると考えた。

イ 見通し

児童は課題を解決するために教科書教材を読む。児童の主体的な学びを充実させるためには、教材から学ぶ際も自分の課題を解決することとどのようなつながりがあるか意識することが重要である。

本単元では、見通しをもたせるために教師のモデル文を活用する。教師のモデル文を児童自身に分析させ、身に付けさせたい力や教材で読み取るべきことを明らかにしながら学習の見通しをもたせる。また、児童と共に学習計画を考えることで、学習の見通しがはっきりし、より児童の主体的な学びが実現できるものと考えた。

ウ 振り返り

学習の見通しをより明確にもたせるために、学習後の振り返りを充実させる。本単元では、振り返りの観点として、「①学習した内容についての感想」、「②この時間に身に付けた力（読み取りのコツ）」、「③自分の課題解決にどう生かせそうか」の3点を設定した。①～③を毎時間全て書かせるのではなく、学習の内容に応じて児童に示すこととした。また、児童の振り返りを紹介、価値付けを随時行って質を高めていきたい。このように次時や課題の解決に向けた事柄と共に、自分が学んだことを一般化させていくことが次の学習に生き、主体的な学びにつながるものと考えた。

(2) 自分の考えを広げ深めるための対話的な学び

ア 教材との対話

児童の主体的な学びの充実を図るためには、興味・関心をもって教材に触れることが大切である。筆者の考えを自分の経験と照らし合わせながら読み進めさせていきたい。そこで、本単元では筆者の考えや課題に対して考えたことや気付いたことなどをノートに書き留めさせていきたい。ノートに自分の考えを書く際、「ノート言葉」として自分の経験や考えを詳しく書くために有効な仮定や想像、問い掛けといった言葉を示すこととした。

イ 他者との対話

考えを広げたり深めたりするには、まず自分の考えをもつことが欠かせない。そこで、二人組での学習を意図的に取り入れ、全員が自分の考えをもてるようにしたい。その後、

必要に応じてグループや全体での交流を行い、様々な考えに触れさせていきたい。また、本単元では読書郵便を通して自分の考えを友達に伝えることとともに、返事を書く活動を通して感じ方の違いに気が付ける場を設定した。

6 学習指導計画（10時間扱い）

	時	学習活動	手だて	評価規準 (評価方法)
一 次	1	○生き物に関するクイズをする。 ○教師の範読を聞く。 ○「ウナギのなぞを追って」を読んで一番心に残ったことをノートに書き、発表する。	○生き物に関するクイズを通して教材への関心を高める。 ○生き物について書かれた本をいつでも読めるようにしておく。	[関]感想はそれぞれ異なることに気付いている。(ノート、発言)
	2	○「ウナギのなぞを追って」の内容でどこに自分の興味のある中心があったのか明確にし、個々の学習課題を設定する。	○興味のある部分を一般化した語句で説明する。以下の3点に読みの視点をしぼる。 ① 生き物のなぞを解く様子 ② 研究者の努力や思い ③ 生き物の生態	[関]初読での自分の興味のある部分を明らかにするとともに、学習の見通しをもっている。(ノート・ワークシート)
きょうみのある部分を中心に、読書郵便にまとめよう				
		○読書郵便について、内容と書き方を知り、今後の学習に対する見通しをもつ。 ○学習の計画を立てる。	○モデルカードを見せ、カード完成に必要な情報は何かを考えさせて、学習の見通しをもたせる。 ○モデルカードを基に、何を学習したらよいか考えさせながら、学習の計画を立てる。	
二 次	3	○事実や意見を読み取って、文章の大体の内容をつかむ。 ○事実を時系列にまとめて筆者の生き方について考えを深める。	○調査したことと発見したこと、考察の並べ替えを通して調査したことを整理させる。 ○調査とその結果を年表にまとめることを通して視覚化し、調査の流れから筆者の努力や人物像について気付かせる。	[読]事実や意見を読み取って、文章の大体の内容をつかみ、筆者の生き方について考えている。(発言、ノート)

4 本 時	○「ウナギのなぞを追って」を読み、12 段落の筆者の思いについて考える。	○事実だけ書かれた文章と、本文とを比較することで、筆者のウナギ研究への思いを読み取る。 ○複数の資料を使った分析方法や14年間も発見できない時期があったことも想起させる。	[読]筆者の研究に対する熱意、技能の高さなどに気付いている。 (ノート、発言)
	○要約の仕方を知る。 【手順】 ①自分が興味をもった部分の理由(意見)を明らかにする。 ②各形式段落の調査方法に関する大切な語や文を見付け、まとめる方法で要約させる。	○教師のモデル文と該当する図書のページを提示し、紹介文の書き方や方法を確認する。 ○自分が興味をもった理由については以下の三つの観点を示し、掲示した「ノート言葉」を活用しながら書かせる。 ①人間と比べて感じたこと ②生態について感動したところ ③筆者と自分を比べて感じたところ ○図表にまとめることも要約の一部であることを押さえる。	[読]要約の仕方を知り、自分の関心の中心に沿って情報を選び出し、要約している。 (ノート)
	○「ウナギのなぞを追って」の読書郵便を書く。	○各形式段落の調査方法に関する大切な語や文を見付け、まとめる方法で要約させる。 ○図表にまとめることも要約の一部であることを押さえる。	[言]指示語や接続語が文と文との意味のつながりに果たす役割を理解し、使っている。 (発言、カード)
三 次	7 ○自分が紹介したい本の読書郵便を書く。 ○選んだ科学的な読み物を読んで、印象に残ったこと(関心の中心)をはっきりさせる。 ○関心の中心に合わせて、要約をする。	○興味を中心になる観点・興味をもった理由についての観点を確認する。 ○サイドラインの代わりに、付箋紙を貼らせる。 ○本文中の図表に着目させるだけでなく、まとめる際に図表を活用させる。	[読]自分の興味を中心に沿って情報を選び出し、要約している。 (ノート)

	8	○自分が紹介したい本の読書郵便を完成させる。	○興味を中心になる観点・興味をもった理由についての観点を確認する。 ○サイドラインの代わりに、付箋紙を貼らせる。 ○本文中の図表に着目させるだけでなく、まとめる際に図表を活用させる。	[読]自分の興味を中心に沿って情報を選び出し、要約している。 (発言、カード)
	9	○受け取った読書郵便の返事を書く。	○興味を中心になる観点・興味をもった理由についての観点を確認する。 ○サイドラインの代わりに、付箋紙を貼らせる。 ○本文中の図表に着目させるだけでなく、まとめる際に図表を活用させる。	[読]興味を中心に明らかにして要約している。(ノート)
	10	○受け取った読書郵便の返事を読む。	○個人で読み合った後、学級全体で自分の意見と友達の見解を紹介し合い、共有する。	[読]それぞれの興味を中心にに応じて選び出す情報や感想が異なることが分かる。(発言、カード)

7 本 時（全 10 時間中の第 4 時間目）

(1) 本時の目標

筆者の文章表現に着目して読み、筆者の研究に対する熱意や思いを読み取ることができる。

(2) 本時の展開

	主な学習活動	指導上の留意点・配慮事項	評価規準（評価方法）
導入	1 事実だけが書かれた12段落を読んで感じたことを発表する。	○説明的な文章には、事実や意見で構成されていることを押さえる。 ○12段落から意見を除いた文章を提示し、本文との違いを感じ取らせる。 ○提示した文章は筆者の気持ち（意見）が除かれていることを押さえる。	

	この段落に筆者が気持ちを書いたのはなぜだろう		
	2 「なか」の部分を音読する。	○音読の目的(自分の考えの根拠になる文や語句を見付けること)を押さえる。	
展 開	3 気持ちを書いた理由について、発表する。	○12段落の文章表現だけに着目するだけでなく、これまでの研究の歴史や様々な工夫などと関連させるようにして理由を考えさせる。	[読]事実と意見の違いを理解し、筆者の表現の工夫について自分の考えを書いている。 (ノート、発言)
	4 12段落に筆者が気持ちを書いた理由について、叙述を基に考えてノートにまとめる。	○考えの根拠になる文や語句を本文から引用して理由を書かせる。	
	5 学級全体で話し合いながら、理由をまとめる。	○自分の意見に自信がないという声や、他の意見を聞いてみたいという声などをいくつか拾い、話し合いで考えを深めていきたいという気持ちを高める。	
ま と め	6 本時でできるようになったことを振り返り、ノートにまとめる。	○筆者の研究に対する熱意、技能の高さなどに関わる意見を価値付ける。 ○振り返りの視点を提示する。	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>本時での振り返りの視点</p> <p>①学習した内容について考えたこと・感想 (本時の振り返り)</p> <p>※早く書きまとめられた児童には、</p> <p>②その時間に身に付けた力(読み取るときのコツ)</p> <p>③自分の読書郵便にまとめるときに生かせそうなことや自分が選んだ本について考えたこと についても書くように促す。</p> </div>			

高学年分科会（第5学年）の検証授業

- 1 単元名 メディアとの関わりについて、自分の考えを標語にしよう
教材名「想像力のスイッチを入れよう」 下村 健一（光村図書5年）

2 単元の目標

- 事例と意見の関係を押さえながら筆者の考えを読むことができる。
- 本や文章を読んで、自分とメディアとの関わり方について考えたことを発表し合い、自分の考えを深めることができる。

3 単元の評価規準

国語への 関心・意欲・態度	読む能力	言語についての 知識・理解・技能
・メディアとの関わり方に興味をもち、それに対する自分の考えをもとうとしている。	・文章の内容を的確に押さえて要旨を捉えたり、事例と意見との関係を押さえたりしながら読んでいる。（ウ） ・メディアとの関わり方について考えたことを発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりしている。（オ）	・語感・言葉の使い方に対する感覚などについて関心をもっている。[イ（カ）]

4 教材の特性

本教材は、メディアから発信される情報を正確に受け止めるために必要な努力について、事例を挙げながら考えを述べた説明的な文章である。巧みな事例で筆者の考えに共感させ、児童にメディアについて興味をもたせることができる。また、仮定して考えさせたり、投げかけたりする表現が多く見られるという特徴があり、児童が自分の経験を思い起こし、自問自答しながら主体的に読み進めることができると考えられる。

本文で、事例と意見の関係を押さえながら読み、筆者の考えを正確に捉えることによって、自分の考えをもたせ、互いの考えを広め深めさせることに適した教材であると考えた。

5 研究主題に迫るための手だて

(1) 自分の考えを広げ深めるための主体的な学び

ア 課題の設定

児童の主体的な学びには、必然性のある課題が必要である。本単元の学習課題はメディアとの関わりについて自分の考えを発信することである。しかし、児童は関わり方についてそれほど身近に感じてはいないと考えられる。

そこで、教材文に入る前に、児童自身がメディアとの関わり方について気を付けていかなければならないという思いをもたせることが、読むことへの目的意識につながると考えた。導入時に教材文で示されている事例を取り上げて、思い込みを体験させることで、メ

ディアとの関わり方を身近に感じさせ、課題解決に向けた意欲を喚起していく。

イ 見通し

課題を解決する方法を思考する過程は、児童の主体的な学びへつなげていくために大切であると考えられる。課題解決までの道のりを児童と共に考え、学習の計画を立てて見通しを持たせることが主体的な学びの第一歩と考える。

本単元は、筆者の考えを読み取ることを通し、メディアについての考えを広げ深める学習となっている。そこで、教材文から筆者の考えを読み取る段階と、読み取ったことを基に自分の考えを広げ深めて標語にする段階の2段階に分けた。このことにより、一単位時間の学習が、何のための学習なのかという目的意識をしっかりとめたい。また、単元のゴールを毎時間意識させることで、次時にどんな学習をするのか見通しをもたせる。

ウ 振り返り

振り返りでは、一単位時間に身に付いた力を自覚させ、次時や言語活動につながるように観点を示して書かせる。観点は三つ示し、「①学習したこと」、「②分かったことや身に付いたこと」、「③学習したこと」が言語活動につながりそうかの観点とする。学習内容に応じて①～③を全て書かせたり、選ばせて書かせたりする。よく書けている振り返りを一単位時間の導入で紹介することで、振り返りについての手本を示すとともに、身に付けさせたい力を価値付けていくことにより、児童が学んだ成果や学びの変容を意識できるようにし、主体的な学びに結び付けていく。

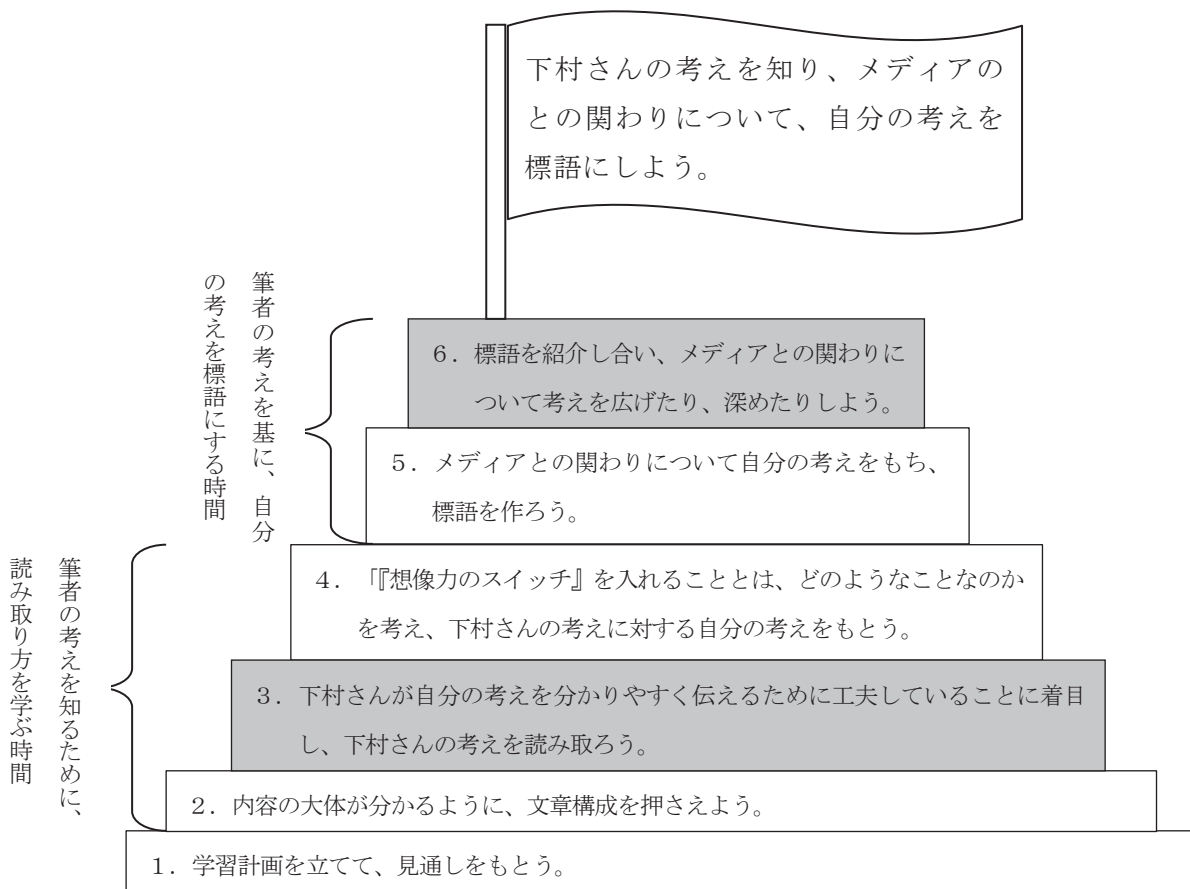


図 学習計画表のイメージ

(2) 自分の考えを広げ深めるための対話的な学び

ア 教材との対話

筆者の挙げた事例や筆者の考えに触れたときに、自分の経験や疑問に感じたことなどを自問自答しながら読み進めることにより、主体的な読み方を身に付けさせる。教材との対話を通し、自分の考えをもてるようにする。

イ 他者との対話

グループ交流や全体交流を通して、自分の考えをもてるようにするとともに、様々な考えに触れることで、自分の考えを広げさせたい。また、交流では、伝え合うだけでなく、他者と自分の意見の違いや似ている部分に気付かせることにより、自分の考えをもったり見直したりする機会としたい。また、交流時に教材文に立ち返ることができるように、教材文を教室の後ろにも掲示するなど、環境を整えた。

6 学習指導計画（6時間扱い）

次	時	学習活動	手だて	評価規準(評価方法)
一 次	1	学習計画を立てて、見通しをもとう。		
		<ul style="list-style-type: none"> ○本文の事例1などから情報の見方について興味・関心をもつ。 ○メディアとの関わりについて自分の考えを標語に表すことを知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○本文を読む前に、本文の図1～3を見せたり、メディアから発信された情報を示したりして、メディアとの関わりへの関心を高める。 ○標語の見本を示す。 ○作成した標語を校内掲示することを伝え、標語を作る目的意識を高める。 	[読] 学習の見通しをもとうとしている。 (観察・発言・ワークシート)
		下村さんの考えを知り、メディアとの関わりについて、自分の考えを広げたり深めたりして標語に表そう		
		<ul style="list-style-type: none"> ○全文を読み、学習の見通しをもつ。 ○学習の振り返りをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○児童の驚きや気付きを大切にし、感想を拾い上げ学習の見通しをもたせる。 ○振り返りの視点を示すことで、一単位時間と単元全体の学びの変容を自覚できるようにする。 	[関] 筆者の意見や情報との関わりに興味をもち、本文を読もうとしている。(観察)
		<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 振り返りの視点 ①学習したこと ②分かったことや身に付いたこと ③学習したことが単元のゴールにつながりそうか (◎○▲から選択) </div>		

二 次	2	内容の大体が分かるように、文章構成を押さえよう		
		<ul style="list-style-type: none"> ○全文を三つのまとまりに分け、文章構成を押さえる。 ○文章構成から筆者の考えの大体を捉える。 ○事例と意見の関係を押さえ、次時の見通しをもつ。 ○学習の振り返りをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○接続語や順序を表す言葉に着目しておおまかな文章構成を捉えさせる。 ○「おわり (15)(16)」から筆者の考えを読み取らせるが、それだけでは筆者の考えを十分に捉えられないことに気付かせる。 ○図や事例文から三つの事例を押さえる。 ○振り返りの視点を示すことで、一単位時間と単元全体の学びの変容を自覚できるようにする。 	<p>[読]文章構成を把握し、内容の大体を押さえて読んでいる。 (観察・発言・ワークシート)</p>
	3	『想像力のスイッチ』を入れる」とはどのようなことなのか読み取ろう		
	<ul style="list-style-type: none"> ○三つの事例と、それに対する筆者の意見を表に整理する。 ○「想像力のスイッチを入れる」とはどのようなことなのかまとめる。 ○学習の振り返りをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○事例は青で囲ませ、筆者の意見には赤でサイドラインを引かせる。 ○整理した表を活用したり文中の言葉を使ったりしてまとめさせ、四つの『想像力のスイッチ』を押さえる。 ○振り返りの視点を示すことで、一単位時間と単元全体の学びの変容を自覚できるようにする。 	<p>[読] 事例と筆者の意見を整理して読んでいる。 (観察・発言・ワークシート)</p>	
4 本 時	『想像力のスイッチ』を入れること」について、自分の考えを広げ深めよう			
	<ul style="list-style-type: none"> ○『想像力のスイッチ』を入れること」とは、どのようなことなのか確認する。 ○下村さんの考えに対する自分の考えをまとめる。 ○書いたものを友達と伝え合う。 ○学習の振り返りをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○前時でまとめた四つの『想像力のスイッチ』を確認させ、「想像力のスイッチを入れること」が大切な理由を押さえる。 ○『想像力のスイッチ』を入れること」について、文中の言葉を手掛かりにして、自分の知識や経験を結び付けて考えさせる。 ○友達の考えとの相違点や共通点に着目するように促す。 ○振り返りの視点を示すことで、一単位時間と単元全体の学びの変容を自覚できるようにする。 	<p>[読]友達との交流を通して、筆者の考えに対する自分の考えを広げたり深めたりしている。 (観察・発言・ワークシート)</p>	

三 次	5	メディアとの関わりについて自分の考えをもち、標語を作ろう	<p>○メディアとの関わりについて、自分の考えを標語に表す。</p> <p>○学習の振り返りをする。</p>	<p>○第1時の学習を思い出させ、自分の知識や経験と関連付けて自分の考えを書かせる。</p> <p>○その標語にした理由を書かせたり、その標語に込めた自分の思いなどの説明を書き加えさせたりする。</p> <p>○校内掲示することを意識させ、相手意識をもたせる。</p> <p>○友達の考えと比べたり、自分の考えを見直したりするように促す。</p> <p>○振り返りの視点を示すことで、一単位時間と単元全体の学びの変容を自覚できるようにする。</p>	<p>[言]語感や言葉の使い方に関心をもってメディアとの関わり方についての標語を表している。(発言・作品)</p> <p>[読]自分の知識や経験と関連付けて自分の考えをまとめ、伝え合うことで、自分の考えを広げたり深めたりしている。(観察・発言・ワークシート)</p>
	6	標語を紹介し合い、メディアとの関わりについて考えをまとめよう	<p>○標語を紹介し合う。</p> <p>○学習の振り返りをする。</p>	<p>○標語を紹介する際には、第1時で作成したものと比較しながら紹介させたり、その標語にした理由や自分の思いも話させたりする。</p> <p>○振り返りの視点を示すことで、一単位時間と単元全体の学びの変容を自覚できるようにする。</p> <p>○学びの変容を自覚させるとともに、それを全体で共有する。</p>	<p>[読]自分の知識や経験と関連付けて自分の考えをまとめ、伝え合うことで、自分の考えを広げたり深めたりしている。(観察・発言・ワークシート)</p>

7 本時（全6時間中の第4時間目）

(1) 本時の目標

筆者の考えに対する自分の考えをもち、友達との交流を通して自分の考えを広げ深めることができる。

(2) 本時の展開

	主な学習活動	指導上の留意点・配慮事項	評価規準（評価方法）
導入	1 前時までの学習を振り返り、学習の見通しをもつ。	・前時の学習感想を紹介しながら、学習計画を振り返り、学習の見通しをもたせる。	
	『想像力のスイッチ』を入れること』について、自分の考えを広げ深めよう		
展開	2 『想像力のスイッチ』を入れること』とはどのようなことなのか確認する。	・サッカーの事例が書かれている段落を微音読させる。 ・前時でまとめた表を活用して確認させ、『想像力のスイッチ』を入れること』が大切である理由を押さえる。	
	3 『想像力のスイッチ』を入れること』について、自分の考えをまとめる。	・筆者の言葉を引用したり、自分の知識や経験と結び付けたりして、根拠を明確にして考えをまとめるように促す。	
	4 自分の考えを友達と伝え合う。 5 自分の考えを見直す。	・自分の考えと友達の考えの相違点や共通点に着目させる。 ・友達と考えを交流して、『想像力のスイッチ』について気付いたことをまとめるように促す。	[読]筆者の考えに対する自分の考えを広げたり深めたりしている。(観察・発言・ワークシート)
まとめ	6 学習の振り返りをする。 振り返りの視点 ①学習したこと ②分かったことや身に付いたこと ③学習したことが単元のゴールにつながりそうか。(◎○▲から選択)	・振り返りの視点を示すことで、本時における学習の成果や考えの変容を自覚できるようにする。 ・次時の見通しをもたせる。	

VI 研究の成果と課題

【全体の成果と課題】

〔成果〕

- 学習計画表の掲示を工夫したことが見通しをもった学習につながり、学習意欲の向上につながった。
- 教材文を読み、解決しようとする必然性が生まれるような課題を設定した。また、解決すべき課題が明確になっていたため、児童が見通しをもって毎時間の学習に取り組むことができた。
- 課題に沿った振り返りによって、単元を通じて学習意欲が持続された。
- 別の単元でも、以前より既習事項を活用している様子が見られた。

〔課題〕

- 本時のめあてが単元のゴールとつながっていないと、児童の振り返りに考えの広がりや深まりが表れず、身に付けた力などの自己の変容に気付かせることが難しかった。
- 自分の考えを深めるためにも、見直す時間を充実させていくことが必要である。

【各分科会の成果】

〔低学年〕

- 解決すべき課題が明確になっていたため、児童が見通しをもって毎時間の学習に取り組むことができた。
- 教材文の書き方のよさが、分かりやすさにあることを押さえると同時に、振り返りに「どのようなところが分かりやすかったか」を書かせるようにしたところ、教材文を学習する前に児童が書いた説明文と比較して、身に付いた力を自覚することができた。

〔中学年〕

- 教材文から事実が書かれた部分だけを抜き出して児童に示した方法は、児童が教材文を主体的に読むことができるようになるとともに、考える必然性を生み出し、児童にとって教材との対話につながった。
- 振り返りシートを活用し、できるようになったことを意識させることで、児童が主体的に本時の学びを振り返ることができた。

〔高学年〕

- 目的意識がはっきりしていたので、子供たちが何のために学習するのか、納得しながら取り組むことができた。
- 他者との交流を通し、ほとんどの児童が自分の考えをもつことができていた。教材文を掲示することで、教材文に戻り、交流する場面が見られた。

平成28年度 教育研究員名簿

小 学 校 ・ 国 語

低学年分科会

学 校 名	職 名	氏 名
品川区立豊葉の杜学園	主任教諭	多田羅 智美
中野区立新井小学校	主任教諭	☆大窪 アヤ子
西東京市立住吉小学校	主幹教諭	○中島 陽一

中学年分科会

学校名	職名	氏名
中央区立豊海小学校	主任教諭	小田 貴弘
中野区立大和小学校	主任教諭	渡辺 毅
府中市立府中第二小学校	主任教諭	田邊 美由紀
町田市立鶴川第三小学校	主幹教諭	☆池本 誠

高学年分科会

学校名	職名	氏名
新宿区立落合第四小学校	主任教諭	馬見塚 拓也
墨田区立中川小学校	主任教諭	◎函師 和哉
江東区立東川小学校	主任教諭	門上 麻衣子
世田谷区立経堂小学校	主任教諭	藤原 裕樹
杉並区立荻窪小学校	主任教諭	磯部 大吾
荒川区立第三日暮里小学校	主任教諭	☆竹内 理子
小平市立小平第十四小学校	主任教諭	今富 美保
多摩市立大松台小学校	主任教諭	☆小宮山 香織

◎全体世話人 ○全体副世話人 ☆分科会世話人

[担当]東京都教職員研修センター研修部教育開発課
指導主事 酒見 裕子

平成28年度

教育研究員研究報告書
小学校・国語

東京都教育委員会印刷物登録

〔平成28年度第142号〕

平成29年3月

編集・発行 東京都教育庁指導部指導企画課
所在地 東京都新宿区西新宿二丁目8番1号
電話番号 (03) 5320-6849
印刷会社 株式会社オゾニックス